熊谷本碩・第四世本因坊道策の棋譜をめぐる考察

熊谷市立江南文化財センター　山下祐樹

序章　国宝「歓喜院聖天堂」囲碁彫刻

妻沼聖天山本殿の国宝「歓喜院聖天堂」の奥殿外側には、七福神の布袋と恵比寿が対局し、大黒が酒を飲みながら、意気揚々と囲碁打ちに興じる姿が彫られている。この彫刻を一つの縁として、歓喜院は囲碁戦の対局「本因坊戦」の会場に選ばれる契機となった。

この彫刻は、平成の大修理を行う前には、風雨の影響など経年により盤面は全く不明であったが、修理の際に協議の結果、本殿再建前の１７世紀末の棋譜によって再現されることが決定し、彩色の塗り直しが行われた。

それは元禄１０年（1697）６月２６日、熊谷出身の熊谷本碩（くまがいほんせき）と本因坊道策の一局で、熊谷が黒番として打つ１１５手目である。布袋（本因坊道策）と恵比寿（熊谷本碩）の囲碁打ちの彫刻に熊谷の魂を吹き込み、白熱した対局の中、相手の本因坊が悩む様子が思い浮かび、更に想像力を引き立てる光景となっている。

歓喜院聖天堂奥殿中央　大羽目彫刻

拡大図（左：布袋　右奥：大黒天　右手前：恵比寿）

第１章　熊谷本碩と本因坊道策

熊谷本碩（くまがい ほんせき、延宝６年（1678）－元禄１４年（1701）推定）は、江戸時代の囲碁棋士であり、武蔵国熊谷宿出身で、本因坊道策門下の五弟子と称される一人で上手格（現在の七段格）が与えられた。２３歳という若さで没したと伝えられる伝説の棋士として知られている。

本因坊道策には「五虎」と呼ばれる有力な五人の弟子として、小川道的、佐山策元、桑原道節、熊谷本碩、星合八碩が存在し、その他にも優秀な弟子が囲碁を究め合った。

熊谷本碩についての詳細な経歴に関する資料は残されていないが、郷里の宿場の地名を名字に置き、囲碁棋士に命名されることが多い「碩」を含む名前であることから、棋士雅名としての「熊谷本碩」であると推定され、本名については定かではないと考えられる。

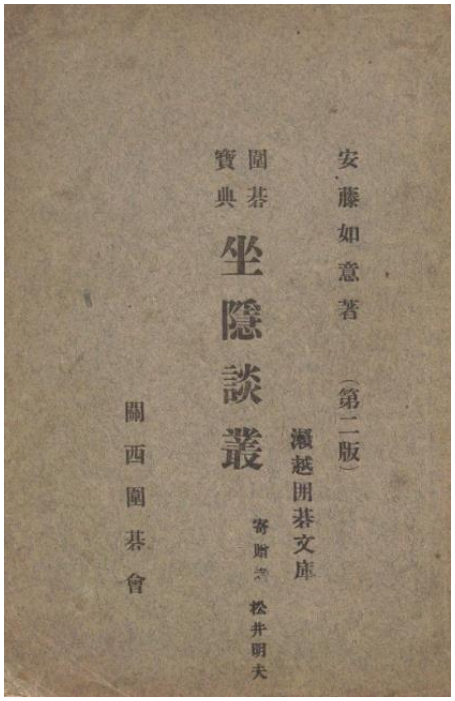
五弟子の中では末弟で、道策とは元禄１０年に８局と、弟子の中では最も多く棋譜が残されており、３勝４敗で１持碁（引き分け）の棋譜が残されている。当時から熊谷本碩の棋風は、堅実で大局観に明るいと評価されている。道策と本碩は元禄１０年（1697 年）８月１２日には１日２局の対局を行っている。その１局目で

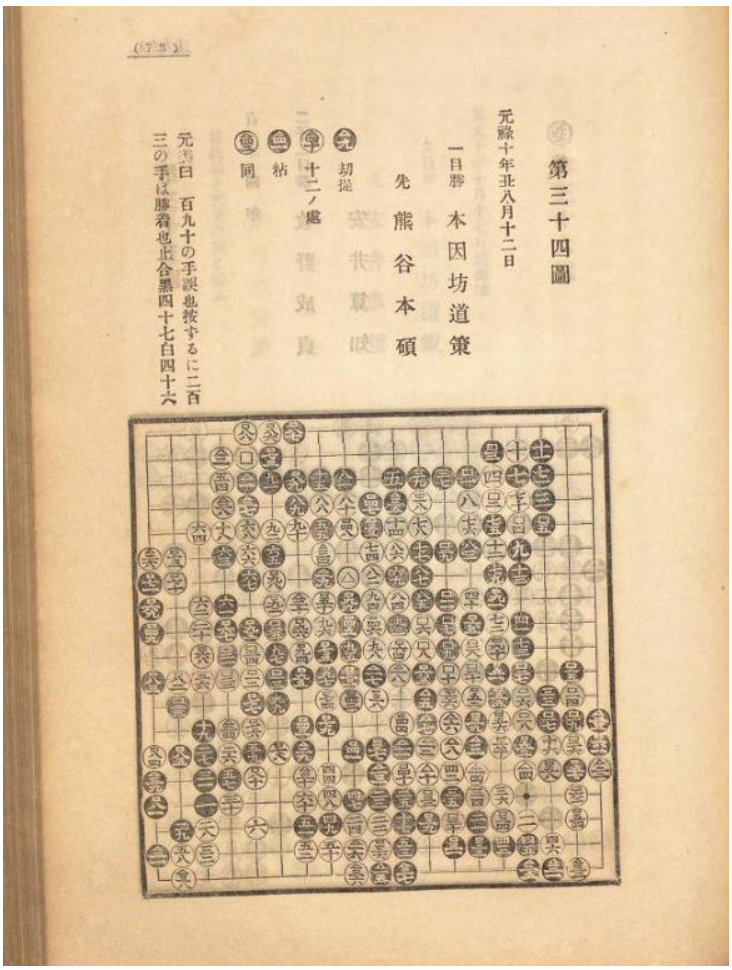
は、棋譜８局のうち７局が１６手目まで本局と同一であり、このような棋譜の記録から、熊谷本碩は本因坊道策の研究囲碁の相手に位置付けられていたと考えられる。その際、その棋譜を引用し、本因坊道策は「白８の手では一路右に立つのがよい」と弟子には教えていたと伝わる。

本碩の師である本因坊道策（ほんいんぼう　どうさく、正保２年（1645）－元禄１５年３月２６日（新暦 1702 年４月２２日））は江戸時代を代表する囲碁棋士で、四世本因坊、名人碁所の名を冠している。石見国（現在の島根県大田市）に誕生し、本姓は山崎、幼名は三次郎で、幼少期より囲碁を本因坊算悦、本因坊道悦に師事し、頭角を現した。圧倒的強さを誇り、囲碁界を風靡した。道策は後世「棋聖」と呼ばれ、史上最強の棋士に名を挙げるものが多く、近代囲碁の原点を本因坊道策に捉える評価も多い。五弟子（五虎）に吉和道玄を加えた「六天王」と称される優秀な弟子がいたものの、熊谷本碩を含めて若年で没した棋士が多かった。これにより道策は、自身の後継者を置かなかったものの、後に道策の実子ともされ、桑原道節からの指導を受けた道知が本因坊家五世を継承している。

第２章　熊谷本碩・本因坊道策対局棋譜

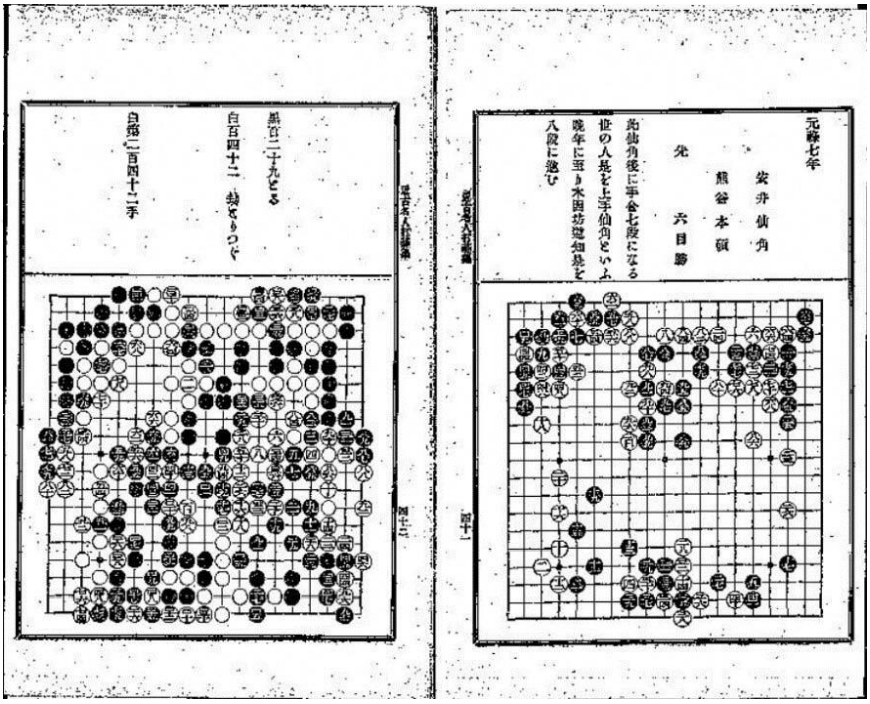
囲碁の棋譜は、安藤如意 著『坐隠談叢 ： 囲碁宝典』関西囲碁会（1910 年２月版）、小林鉄次郎、 杉山博雄著『近古名人打碁集（囲碁全書　第１０編）』博文館（1902）などの資料があり、旧来の棋譜資料を編集した内容の書籍が刊行されている。その多くは囲碁棋譜の写本資料の転載のほか、日本から現在の中国に当たる地域に伝来した囲碁棋譜資料が再び日本の囲碁資料として活用されるなど、囲碁文化の基礎情報としての集約化が進んでいる。そして上掲の書籍が現代に至り再編集されるなどして、棋譜の情報がアーカイブズされている状況にある。『近古名人打碁集』には、「安井仙角、熊谷本碩手合」という項目があり、熊谷本碩の棋譜を紹介する箇所も確認できる。





安藤如意 著『坐隠談叢 ： 囲碁宝典』　熊谷本碩と本因坊道策の棋譜掲載頁

『近古名人打碁集』



「安井仙角、熊谷本碩手合」棋譜

囲碁棋譜に関する資料の中から、熊谷本碩と本因坊道策の棋譜を抽出すると、次のような対局一覧を導くことができる。この棋譜全８局は本因坊道策の弟子の中でも最多であると推定される。勝敗は、全８対局で、本碩４勝、道策３勝、引き分け１となっている。

熊谷本碩・本因坊道策対局一覧

	対局日	結果（勝ち）	手	黒番	白番
1	1697 年 6 月 21 日	熊谷本碩	204	熊谷本碩	本因坊道策
2	1697 年 6 月 24 日	熊谷本碩	190	熊谷本碩	本因坊道策
3	1697 年 6 月 26 日	本因坊道策	130	熊谷本碩	本因坊道策
4	1697 年 6 月 26 日	熊谷本碩	201	熊谷本碩	本因坊道策
5	1697 年 8 月 10 日	熊谷本碩	278	熊谷本碩	本因坊道策
6	1697 年 8 月 12 日	本因坊道策	257	熊谷本碩	本因坊道策
7	1697 年 8 月 12 日	本因坊道策	240	熊谷本碩	本因坊道策
8		無勝負（引き分け）	54	熊谷本碩	本因坊道策

棋譜が残る対局年月日は、元禄１０年（1697）の６月２１日から同年８月１２日に限られる。「持碁（じご）」と呼ばれる無勝負引き分けの１局は年月日が不明である。２００手を超える対局も５局あり、その多くが熱戦となっているが、あえて同じ手を重ねるなどの棋譜が見受けられることから、囲碁の打ち方の探求を目的とした研究囲碁の特色が感じられる。また、棋譜に残されていない無数の対局があったことを想像させるもので、本因坊道策と熊谷本碩の師弟関係の深さを再認識させるのである。また、残存するもの以外の棋譜資料も残されている可能性があり、文書資料等に関する継続的な調査が必要である。

棋譜には数字を手番順に表記し研究目的に使用されるものが多い。本稿では対局最終の棋譜を完成形として捉え、棋譜として残された対局の終結部について示す。

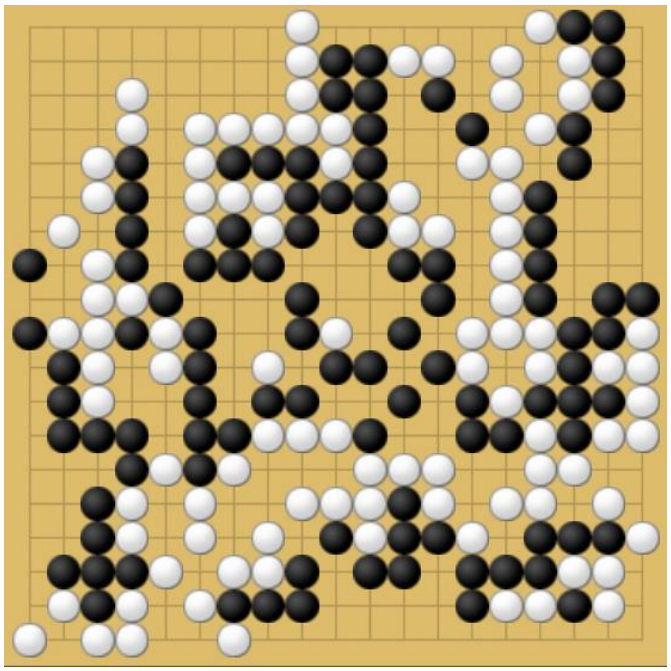
①　熊谷本碩　対　本因坊道策

対戦日：　1697-06-21

黒番：　熊谷本碩

白番：　本因坊道策

黒勝目　204 手



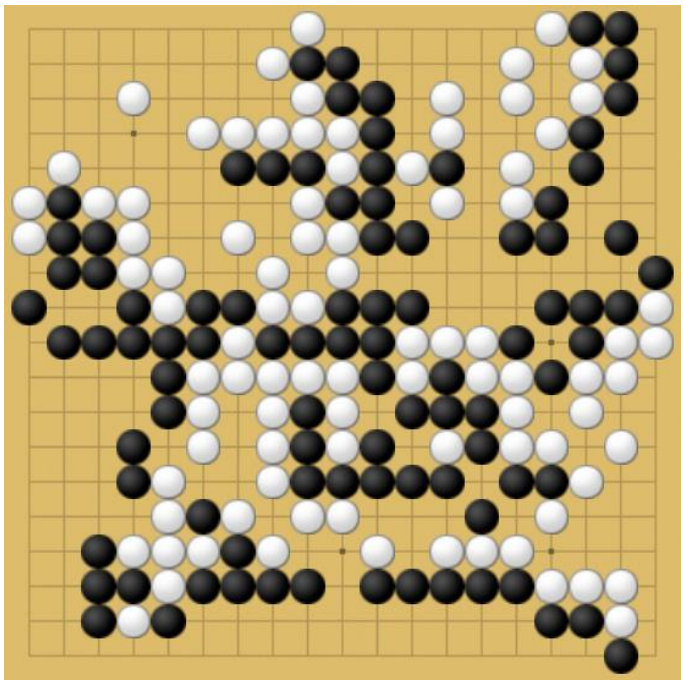
②　熊谷本碩　対　本因坊道策

対戦日：　1697-06-24

黒番：　熊谷本碩

白番：　本因坊道策

黒勝目　190 手



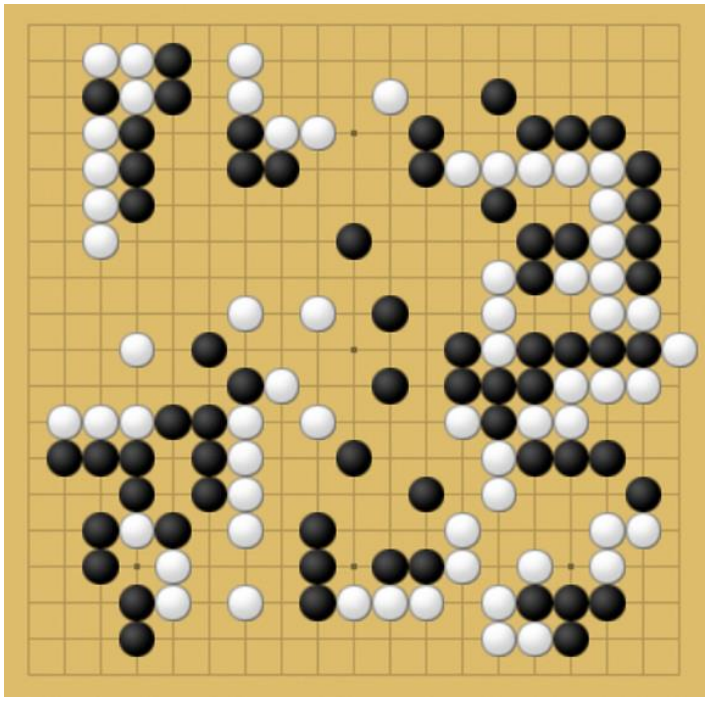
③　熊谷本碩　対　本因坊道策

対戦日：　1697-6-26

黒番：　熊谷本碩

白番：　本因坊道策

白中盤勝　130 手



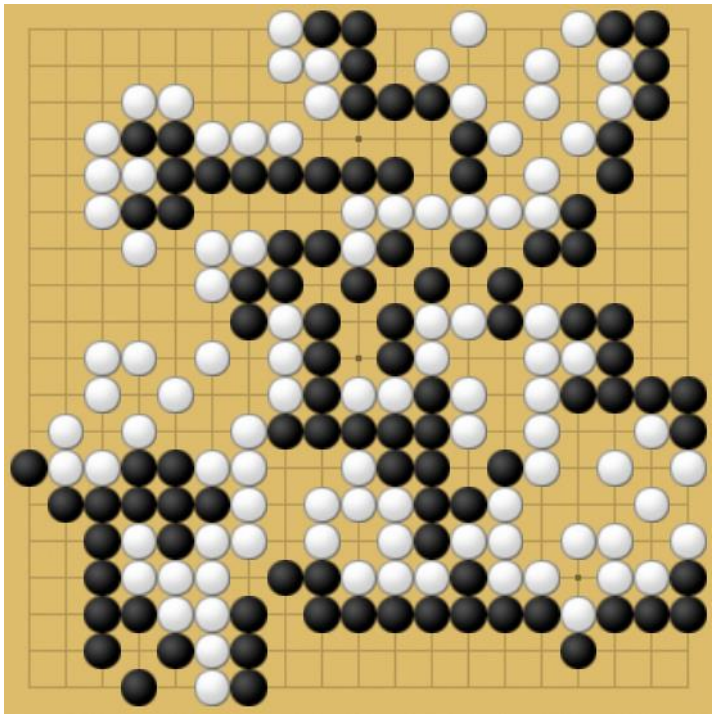
④　熊谷本碩　対　本因坊道策

対戦日：　1697-06-26

黒番：　熊谷本碩

白番：　本因坊道策

黒勝目　201 手



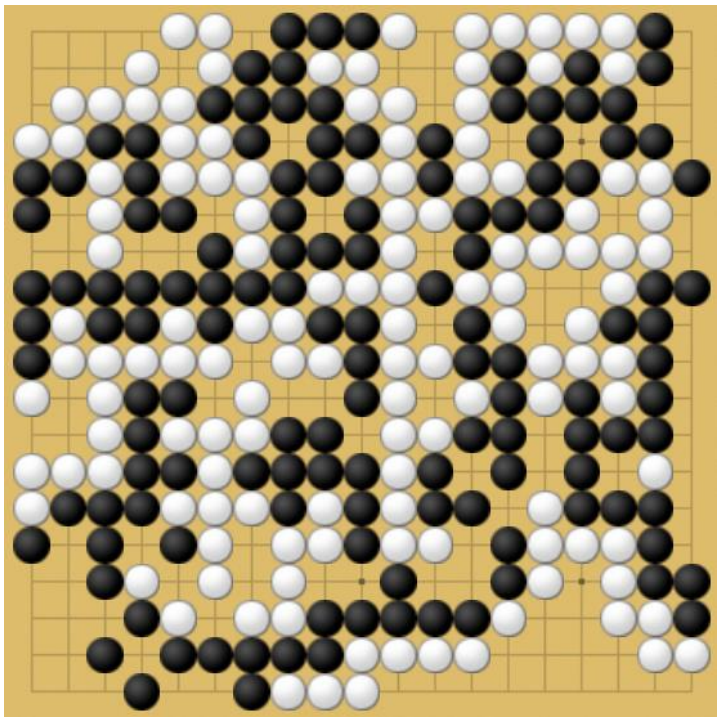
⑤　熊谷本碩　対　本因坊道策

対戦日：　1697-8-10

黒番：　熊谷本碩

白番：　本因坊道策

黒勝目　278 手



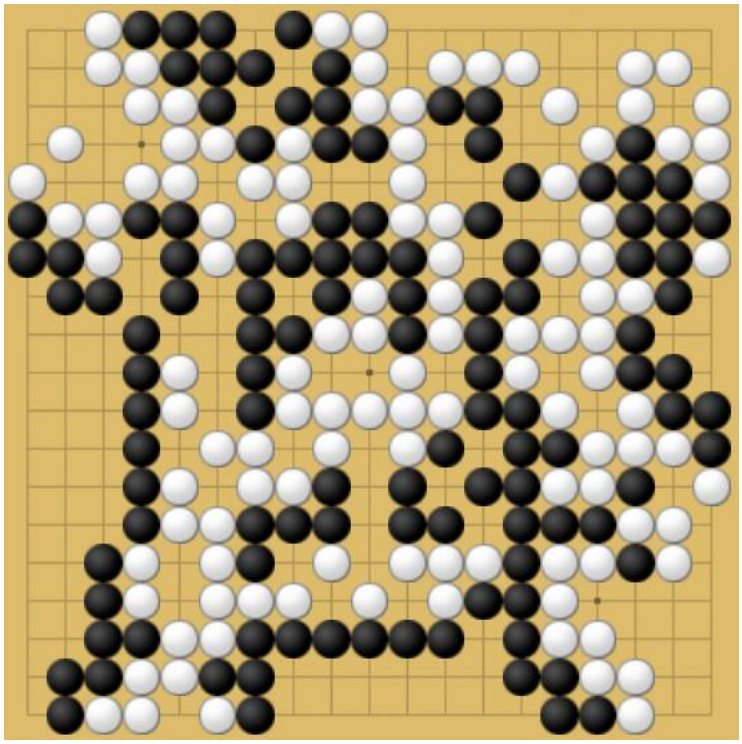
⑥　熊谷本碩　対　本因坊道策

対戦日：　1697-08-12

黒番：　熊谷本碩

白番：　本因坊道策

白勝目　257 手



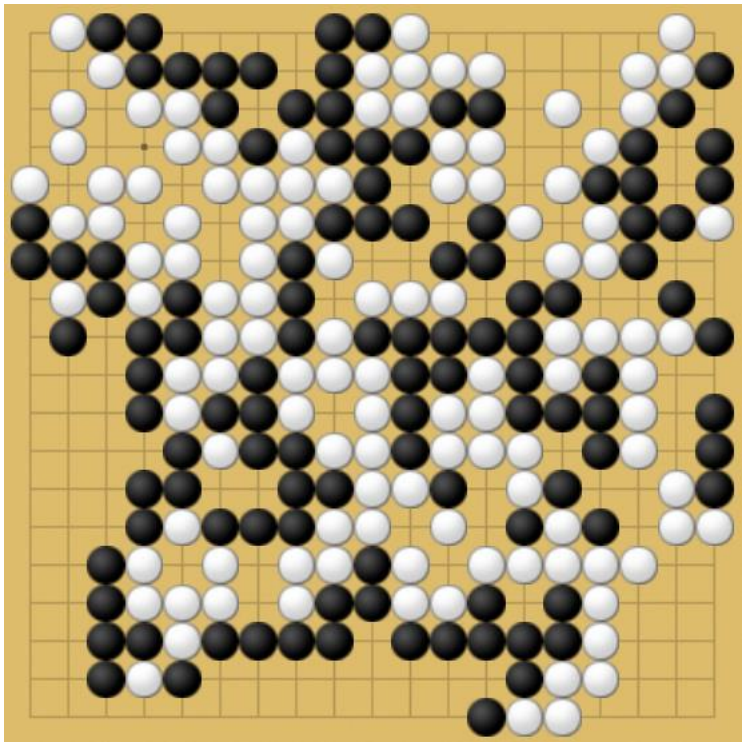
⑦　熊谷本碩　対　本因坊道策

対戦日：　1697-08-12

黒番：　熊谷本碩

白番：　本因坊道策

白勝目　240 手



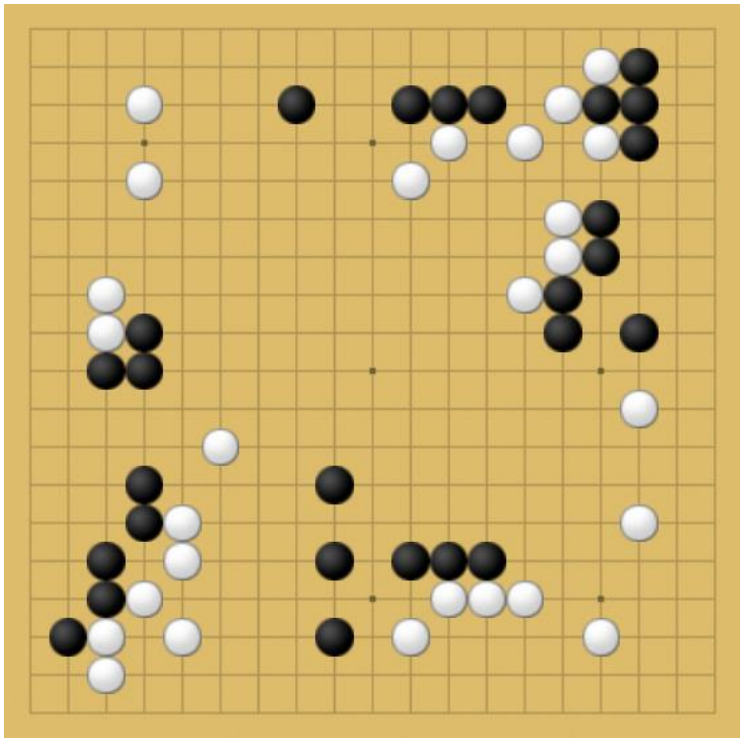
⑧ 熊谷本碩　対　本因坊道策

対戦日：

黒番：　熊谷本碩

白番：　本因坊道策

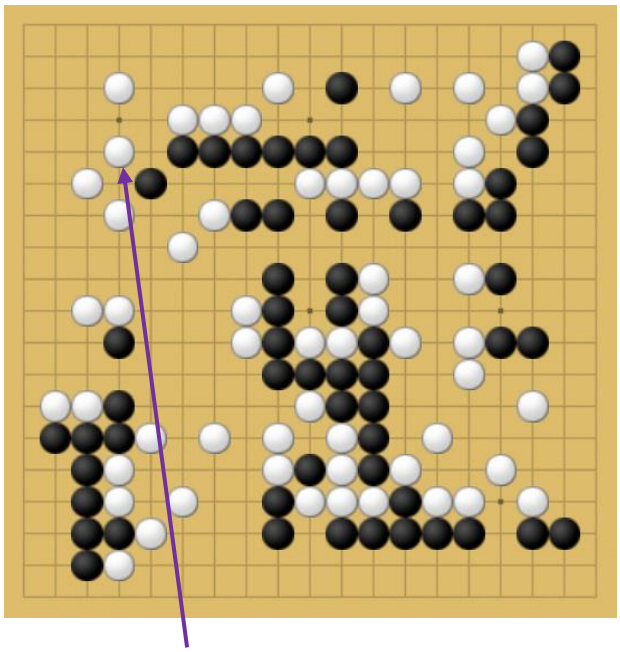
無勝負記録　54 手



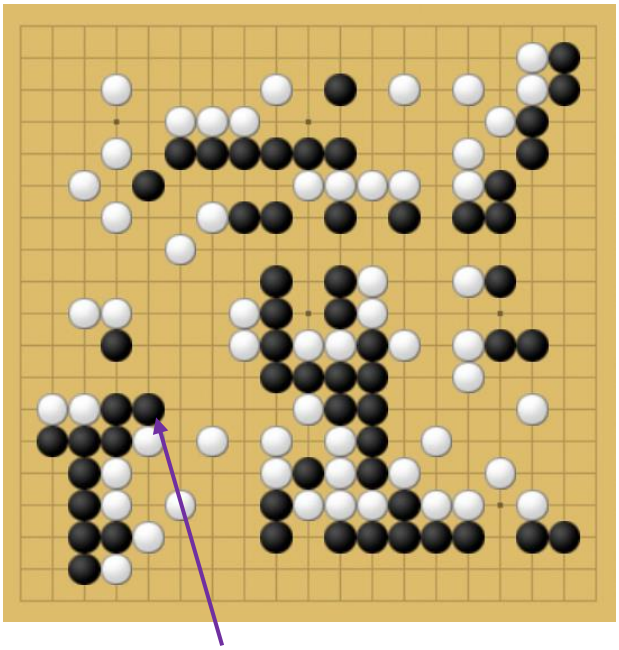
第３章　妻沼聖天山囲碁彫刻の棋譜をめぐって

平成の大修理で再現された「歓喜院聖天堂」の囲碁彫刻では元禄１０年（1697）６月２６日の２回目の対局（④）の１１４手の後、恵比寿（熊谷本碩）が１１５手目の黒を打つ瞬間が主題となっている。妻沼聖天山の御利益の一つに挙げられている縁結びに由来して「いいごえん」の語呂合わせから、日本棋院熊谷支部長の新井三郎氏の発案で１１５手目直前の棋譜が採用された。

白　本因坊道策　１１４手



黒　熊谷本碩　１１５手



この対局は後に２０１手まで碁を重ねることになり、対局の全体を見通すと、この瞬間は中盤の後半に差し掛かる頃の一手であることが分かる。この時点ではまだ勝敗に決するまでには至っていないが、囲碁の対局状況としては熊谷本碩が優勢で碁を進めることになる。

囲碁彫刻の解説においては、勝負の決する一手として紹介されることがあるが、この１１４手及び１１５手は、まだ終盤が見通せない状況下での一手であることが分かる。

その一方で、恵比寿が一手を打とうとする前で、布袋が手を頭に置き、悩む様子のユーモラスな表情が、熊谷本碩と本因坊道策という別次元の熱戦を表現していることを考えると、歴史的に残された名棋譜を出典として復元されたことの意義は大きいと思われる。

歓喜院聖天堂奥殿「囲碁彫刻」黒の一手を打とうとする恵比寿（熊谷本碩）

第４章　棋譜という文化的情報の活用

囲碁について精通している囲碁愛好者や囲碁対局を日常的に楽しんでいる人々にとり、歴代の著名棋士が残した棋譜は、囲碁の精進に向けた一つの教則情報になり得るものである。また、棋士同士の熱戦を記録化した棋譜は、その棋士の生涯を知る上でも肝要な資料であることは確かである。

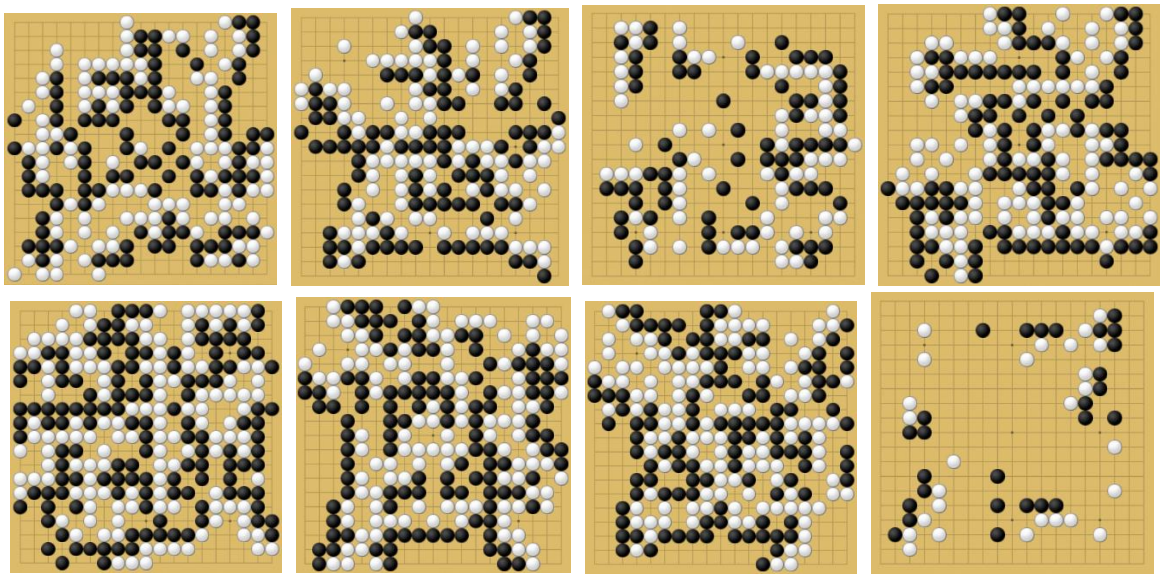
その典型として、熊谷本碩は熊谷宿出身という経歴のみが知られ、その出自に関する資料が皆無の中で、本因坊道策との対局などの棋譜が残されたことによって、「熊谷本碩」という棋士の存在が恒久的なものになっていることに気付かされるのである。

筆者も囲碁のルールなどを知るにつれて、その奥深さと難しさに立ち止まるところであるが、対局の最終手を置いた段階で完成した棋譜を見ると、棋士同士の熱い想いが感じられる。棋譜は碁盤に置かれた白と黒の石によって表現された対局の記録そのものであるとともに、白と黒のせめぎ合いが印象強く表現されているともいえる。国宝「歓喜院聖天堂」の碁盤彫刻の再現などに利用されるなどの事例は珍しいが、棋譜を一つの遺産と捉え、熊谷出身の熊谷本碩の棋譜に対する興味関心を喚起することも可能であるように思える。本因坊道策との８局の棋譜は、熊谷の歴史における貴重な文化的情報の意義を有している。

１７世紀末の奇跡の棋譜をデータアーカイブズし、今後、熊谷デジタルミュージアムでオープンデータ化するなど、熊谷本碩の存在について継承していく意義を改めて感じている。併せて、現時点で関連資料が限られている熊谷本碩に関する資料収集と調査研究を通じて、人物像や経歴の解明を進めていきたいと考えている。

また、囲碁に対する関心の有無を問わず、棋譜の利用活用は可能である。棋譜をデザインと捉え、アートでの利用をはじめ、地元産品のパッケージや布製品のテキスタイルなどへの利用提案もその一例である。熊谷における囲碁文化の啓発とともに、棋譜を熊谷における歴史的デザインの一つとして周知させることも興味深い方策であると考えている。このような別分野における活用も、「本因坊戦」の対局会場となる熊谷ならではの文化振興に結び付くように思われる。

熊谷本碩・本因坊道策　対局棋譜テキスタイル案



主要参考資料

・宗教法人歓喜院『歓喜院聖天堂保存修理工事報告書』（本文編・図版編）2011 年
・安藤如意『坐隠談叢』関西囲碁会 1910 年
・酒井猛『玄妙道策』日本棋院 1991 年
・本因坊道策『道策全集』日本棋院　1991 年
・呉清源『道策』日本囲碁大系第 3 巻　筑摩書房 1977 年
・小林鉄次郎，杉山博雄『近古名人打碁集』囲碁全書：第 10 編　博文館 1902 年
・『日本古典文学大系』第 72　岩波書店　1966 年
・瀬越憲作『囲碁百年』1　平凡社　1968 年
・高尾善希「近世囲碁家元本因坊家に関する基礎的諸問題」『遊戯史研究』25　2013 年